



Vol.43

机の上の小さな変革



未知なる対応力

こんにちは、菅俊一です。今回は、身体への対応力について一緒に考えていきたいと思います。まずはじめにお手数ですが、大学ノート、本（だいたいA5サイズくらいの大きさ）、A4サイズのバインダーファイル、マグカップ（何も入っていない空のもの）を用意してください。



準備ができたなら、大学ノートとマグカップの2つを同時に片手で持ってみましょう。使用する手は、左右どちらでも構いません。

私の場合は、大学ノートは柔らかいので丸めて筒にしたら、マグカップの持ち手と一緒に掴んで持ってみました。みなさんはどのように持ちましたか？

次は、先ほどと同じように同時に片手で2つの物を持つてほしいのですが、今度は本とマグカップでやってみましょう。本は大学ノートよりは硬くて厚いので、おそらく先ほどとは違った持ち方になるのではないかと思います。

さて今度はどうでしょう。私は、今度は親指と人差し指で本を掴んでから、残りの指を持ち手に通して、マグカップを持ちました。

それでは最後に、同じように片手でA4バインダーファイルとマグカップを持ってみてください。今度は大きくて硬い板のような物とマグカップの組み合わせになり

ます。

私はバインダーをトレーのように持って、その上にマグカップを乗せて運ぶ形で持つことにしました。

試してみたらどうにかなることも

ここまで、3種類の物の組み合わせで、強引に2つの物を同時に持つということをしてもらいました。その都度、物の大きさや重さ、硬さなどを読み取ったうえで、掴んだり挟んだりそれぞれの指の使い方を探りながら、2つの物の重心が安定するように持ち方を変えていったのではないかと思います。見た目から考えると「本当にできるかどうか分からない」という物の組み合わせでも、試してみると意外とどうにか持ててしまったのではないかと思います。

このように、私たちの身体は環境に柔軟に対応して様々な行動を取ることができます。その対応力は、ただ外から見て想像しているだけではあまり働くことはなく、今回のように実際に手を動かしてやってみることで初めて、視覚だけではなく重量バランスや硬さなどの情報を手に入れて発揮することができるわけです。

一見難しそうに見える問題に遭遇すると、私たちは思わずどう回避するかを考えてしまいがちですが、とにかく試してみれば、自分の未知なる対応力が引き出され、思いも寄らない解決策を手に入れられることがあるのです。



PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。